

遊びの時間に観察された笑い声に注目し、ヒトの笑いと同様と考えられる野生チンパンジーの「笑い声」との比較を行った。その結果、くすぐりや追いかけっこにおける笑い声にはヒトとチンパンジーとで共通点も見られたものの (Matsusaka 2004, Primates 45: 221-229), 他者の失敗などへの「嘲笑 (攻撃的な笑い)」があることなど、ヒトに特徴的だと考えられる点がいくつか明らかになった。この内容は、まず日本子ども学会などにて発表したのち、さらに笑いの進化について考察を加えた総説論文を執筆し、学術誌に投稿中である。

年度の後半には、タンザニアのマハレ山塊国立公園において、野生チンパンジーの野外調査を行った。おもに未成熟個体を対象として個体追跡を行い、攻撃的行動や闘争後の行動の発達についてのデータを収集した。闘争時の悲鳴の起こり方やその後の交渉などにヒトとの相違点があるという印象を掴んだ。今後、更に詳細にヒト幼児との比較を行う予定である。

5-7 チンパンジーにおけるパターン優位効果の検証 後藤和宏 (慶應義塾大)

本研究の目的は、チンパンジーにおけるパターン優位効果を検証することである。パターン優位効果とは、ヒトの視覚に関する実験で、右上がり、左上がりの斜め線分の弁別において、線分だけを弁別する時よりも両方の刺激に「L」字のコンテキストが付加された時に反応時間が短くなることをいう。昨年度の共同利用研究で、すでにチンパンジーでもヒトと同様のパターン優位効果が見られることが確認された。本年度は、チンパンジーでもヒトと同様に付加するコンテキストによっては優位効果ではなく阻害効果が見られることが明らかになった。

また、これまで斜め線分を弁別要素とする刺激を用いて実験を行ってきたが、本年度は、さらに4種類の新しい刺激セットを用意し、パターン優位効果を追試した。これらの刺激のうち2種類は斜め線分同様、平面的な図形であり、残り2種類は立方体、円錐といった3次元的な図形であった。チンパンジーもヒト同様、平面的な図形ではパターン優位効果が確認されたが、チンパンジーでもヒトでも3次元的な図形ではパターン優位効果が見られなかった (ヒトの先行研究では同じ刺激でパターン効果が見られている)。先行研究と本研究の結果が一部一致しなかったのは、先行研究ではキーボードを入力しているのに対して本研究ではタッチスクリーンを入力デバイスとして用いているなどの実験手続きの違いによるものかもしれない。今後、さらなる検証が必要であろう。

5-8 物体ベースの注意の側面からみた視覚認知の霊長類の起源

牛谷智一 (千葉大・文)

チンパンジーを用いた過去2年間の研究では、標的の呈示に先立って手がかりを呈示し、両者が同じ物体内に位置する条件の方が、別々の刺激に位置する条件よりも標的刺激への反応時間が短いことを確認した (物体ベースの注意)。昨年度は、他の物体によって一部隠蔽された物体であっても、隠蔽部分を知覚的に補間して、その物体全体への注意が賦活されることを明らか

にした。今年度は、これまでの成果を応用し、ヒト以外の動物ではほとんど報告のない透明視を調べた。隠蔽条件では、モニタ上に2つの長方形をX型に重ねて配置し、さらに透明視条件では、ヒトにとって一方が透けて向こうの片方が見えるような輝度配置にした。統制条件では、透明視と同じ輝度配置ながら、輪郭の配置をずらすことにより、長方形が分断されたように見える刺激を呈示した。手がかりと同じ物体内に出現した標的刺激への、チンパンジーの反応時間は、隠蔽条件と透明視条件では短く、統制条件では遅かった。チンパンジーが透明視を知覚し、透明視によって1つとなった物体全体を賦活するような注意過程があることが示唆された。

6-1 麁猿信仰の記録とニホンザル古分布域との相関関係

中村民彦 (NPO 法人ニホンザルフィールドステーション)

麁猿とは既に猿の頭蓋骨や手の骨を祀り、牛馬や家族の無病息災と五穀豊稔等を祈願した信仰である。当風習は東北全域に流布されていたが残留形態や口碑の全容は充分に解明されていない。現在までの調査結果に従来の事例も加えると青森県 3, 秋田県 27, 岩手県 30, 宮城県 5, 山形県 0, 福島県 0, の計 65 を確認する事ができた。保存形態の内訳は頭蓋骨 59, 手 5, 足 1 である。頭蓋骨 59 の性別はオス 37, メス 22 である。年齢は 5 歳以下 3, 6 歳~10 歳 17, 10 歳以上 39 である。頭蓋骨には「守護神」「縁起物」「薬用」、手の骨には「豊作」「安産」等の口碑を聞き取りした。頭蓋骨と手の骨には祈願の内容に使い分けが認められたが足は不明である。捕獲に使用された狐具類に関しては、鉄砲の他に「トラバサミ」や「猿つきヤリ」等も散見された。また頭蓋骨を生業のマタギも存在し流通も行われていた。この様にマタギも関与し集団狩猟による捕獲が活発に実行されていた。明治 10 年ほどまで北東北の全域にニホンザルが生息していた事が推測されている。それが今では下北半島、津軽、白神、五葉山地域個体群の部分的生息を確認するにすぎない。しかもこの 3 県からは麁猿も発見されている。他にも食用、薬用、衣料等にと捕獲された事象や口碑も少なくない。古分布空白地域の調査研究は民俗学的側面からのアプローチも重要と考え、更に検討を重ねる。

6-2 高崎山餌付けニホンザル個体群管理のための栄養状態の把握

栗田博之 (大分市教育委員会)

個体群管理のため、成熟雌の体重と体長 (目からシリダコ上端までの直線距離) の計測を進めてきた。分析が終了している 2002 年から 2005 年までの値から求めた体格指数 (体重 (kg) を体長 (m) の自乗で割ったもの、標本数、平均±標準偏差) は、2002 年: 6, 32.7±1.16; 2003 年: 11, 32.2±2.51; 2004 年: 21, 32.6±2.40; 2005 年: 41, 32.7±2.34 であり、4 年間の分析に過ぎないが、顕著な体格指数の変動は認められなかった。

年齢が 21 歳以上の個体などを除いて、体格指数による翌年出産率の違いを調べた。49 個体の体格指数の範囲は 28.6-37.3 であったため、33 未満と 33 以上とに分けて出産率を比較したところ、前者では 21 個体中 13 個体